

# ワーケーション&ブレジャー はたらく・やすむ・いきる

観光庁 国際観光部 参事官 (MICE) 付 おおや ちあき 大宅 千明

## 1. 背景

コロナ禍により、テレワークが都市部を中心に急速に普及し、職場以外で働くことが可能となった。現在は在宅勤務が多いが、本来、テレワークは時間や場所を有効に活用できる働き方である。テレワークの浸透に伴い、職場や自宅にとらわれず、自分の好きな場所で仕事ができるような環境が徐々に整いつつある。

職場や自宅を離れ、好きな場所で仕事をしながら余暇も過ごせるようになることは、働き手のウェルビーイングを向上させるとともに、日常にない気付きや学び、交流を得る機会となる。それ

は、働き手のモチベーションや成長につながり、所属する企業にもイノベーションや競争力をもたらすものである。

さらに、働き方改革にもなり、地域との連携を通じて地方創生にも貢献するなど、様々なメリットが生じることが期待される。受け入れる地域においても、平日の旅行需要の創出につながるだけでなく、都市部の企業の働き手との交流により、地域課題の解決につながるアイデアや知見を得られるなどのメリットがある。

そこで、観光庁では、ワーケーション<sup>\*1</sup>やブレジャー<sup>\*2</sup>などの仕事と余暇を組み合わせた旅行スタイルの普及・促進に取り組んでいるところである(図-1)。



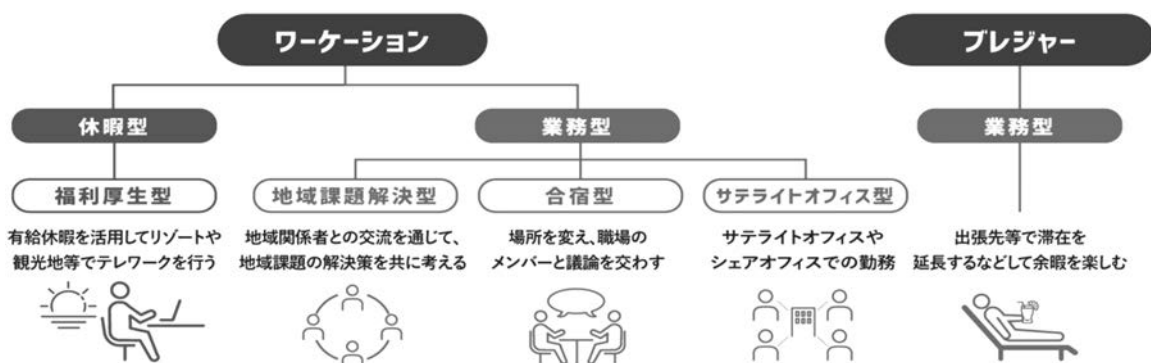


図-1 ワーケーションの実施形態（イメージ）

## 2. 現在の課題と取組

観光庁が昨年11月に実施した調査によると、ワーケーション等を実施した従業員の割合は4%、制度として導入している企業も5%にとどまっている。ワーケーション等に対する受入側（自治体等）の期待は高い一方、利用側（企業等）においては、参考となる事例が少ないこと等もあり、その効果や意義について十分に理解されているとはいえない状況である。

このため、観光庁では、具体的な実施事例を創出すべく、令和3年度に全国40社の企業と40の地域を選定し、各企業が地域でワーケーション等の体験を行うモデル事業を実施した。例えば、株式会社リコーでは、北海道富良野市において、コロナ禍で入社した新卒入社2年目の社員（有志）を対象にした研修プログラムにワーケーションを

活用した。

このプログラムは、環境問題や地域課題に対する理解促進と、交流機会が少なかった同期入社メンバーとの仲間意識の醸成を目的としており、通常のテレワークによる業務のほか、大自然を五感で感じて学ぶ環境プログラムの受講や、地域の方々との富良野市の観光課題についての議論、地元高校生との交流等を行った（写真-1）。

ワーケーションを通じて、同期入社メンバーの一体感が生まれるとともに、大自然の中でのプログラムや住民の方々とのワークショップは、社員が環境問題や地域の課題をリアルに理解する機会となったとのことである。

本事業の参加者の総合満足度は92.4%と高く、参加企業の85%が成果を実感できたと回答し、72.5%が今後もワーケーション等を推進していくと回答しており、実際に体験することでワーケーション等の効果が実感でき、導入に向けた前向きな検討につながることを示唆している。



写真-1 ワーケーションの実施風景

### 3. 今後の方向性

ワーケーションの意義や効果をさらに社会に浸透させ、普及を図るためには、引き続き、経営者クラスも含めた体験機会を提供し、好事例や効果等について発信するとともに、関係省庁の施策とも連携を深めていくことが重要であると考えている。

また、積極的にテレワークやワーケーション等に取り組む企業や自治体等の関係者と連携し、好事例の収集・横展開や各主体の取組の「見える化」等を通じて、関係者の自律的な取組を広げていくための仕組みも必要であると考えており、テレワークやワーケーション等の推進に向けた官民推進体制を構築することを検討している。

- \*1 「ワーケーション」とは、ワーク（仕事）とバケーション（休暇）を組み合わせた造語。テレワーク等を活用し、普段の職場や自宅とは異なる場所で仕事をしつつ、自分の時間も過ごすこと。余暇中心の場合と業務中心の場合（地域課題解決、合宿、サテライトオフィス等）がある。
- \*2 「ブレジャー」は、ビジネスとレジャーを組み合わせた造語。出張などの機会を活用し、訪問先で滞在を延長するなどして余暇を楽しむこと。

